

松 山 大 学 論 集
第 32 卷 第 2 号 抜 刷
2 0 2 0 年 6 月 発 行

評伝 入江獎先生の人と学問（その1）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 曄 弘

評伝 入江獎先生の人と学問（その1）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 埤 弘

目 次

はじめに

第一章 生誕から松山商科大学就任まで

（1923年6月～1951年3月）

第二章 松山商科大学教員時代

第1節 松山商科大学－教員時代

（1951年3月～1973年3月）

1）1951（昭和26）年度

2）1952（昭和27）年度

3）1953（昭和28）年度 以上，本号

4）1954（昭和29）年度 以下，次号

）

16）1972（昭和47）年度

第2節 経済学部長・大学院経済学研究科長時代

（1973年4月～1984年3月）

第3節 再び教授に戻って

（1984年4月～1989年3月）

第4節 再雇用期の入江先生

（1989年4月～1994年3月）

第三章 退職後の入江先生（1994年4月～2005年4月）

おわりに

は じ め に

入江獎先生（1923年6月～2005年4月）は、稻生晴松山商科大学学長（在任：1980年1月～1985年12月）によると、その研究態度は「緻密さ，厳密さ

に優れ……学界の常識や定説といったものに敢然と挑戦し自分独自の見解をたて……異端的……独特なもの」であるとして、次のようなエピソードを紹介している。それは、1953年秋、九州大学の向坂逸郎教授（労農派マルクス経済学者）が松山の稲生先生宅を訪問したときのこと、入江先生も同席し、入江先生は雑談に時を過ごすことなく、直ちに向坂教授に対し、「私はスミスに労働価値説はないと考えるのですが、如何でしょうか」との質問を発したという。それに対し、教授は、言下に「そりゃ間違っている。そんなことはない。もっとよく読んでみ給え」との断言が返り、これ以上話にならなかったとのことである。入江先生は、若きころから、学界の常識にとらわれず、気骨もあり、そして一貫して「几帳面でひたむきな研究態度」を貫いた経済学史研究者であったといえる¹⁾。

また、入江先生は学生に対する教育指導にことのほか熱心であった。稲生先生は「入江先生ほど一途にそれを実践してきた人は少ない。入江さんは公私両面の人生を見事に学問研究で統一して、自分の首尾範囲というか生き方を頑なまでに守りとおした」と述べているが²⁾、まさにその通りである。それは、入江先生のゼミの同窓会『つくし会』の機関誌『つくし』を読むとよくわかる。入江先生は熱心に学生を思い、指導し、学生に多大の人格的影響を与え、また慕われたことが判明する³⁾。

入江先生は1941（昭和16）年4月大阪商科大学予科に入学し、予科時代には哲学、文学など幅広く勉強し、1943（昭和18）年10月学部に入學するや、学徒出陣し、3年間の空白のあと、戦後の1946（昭和21）年5月学部に戻り、一谷藤一郎のゼミに入り本格的に経済学の勉強を開始し、ケインズ、マルクス、

1) 稲生晴「入江先生と私」『入江 奨教授記念号』（『松山商大論集』第5巻第5号、1993（平成5）年12月）。

2) 同。

3) 『つくし会』は1960（昭和35）年2月に結成され、機関誌『つくし』は1968（昭和43）年3月に創刊され、先生が亡くなったあとも継続して、2006年1月、第29号が最終号となった。

ヒックスなどと苦闘した。卒業論文はヒックスの『価値と資本』の翻訳であった。大学院では堀経夫博士の門をたたき、経済学史の研究を本格的に開始し、堀博士の多大な影響の下、「原典主義」「内在主義」を身に体された。広島大学の助手をへて、1951（昭和26）年3月、松山商科大学商経学部に講師として赴任され、以降、スミス、リカードウ、ミル、マルサス、マルクス、ケインズ、ヒックス、ジェボンズ、ハロッドなど、数多くの経済学理論、その学説を取り上げ、研究した（中心はスミスとマルサス）。入江先生は、基本的にはマルクス経済学の立場であるが、古典派や近代経済学を幅広く研究し、マルクス経済学の枠内におさまらない経済学史研究者であったと思う。

入江先生の経済学史の研究方法は、堀経夫の「原典主義」「内在主義」をさらに進化させ、ある学説はある歴史段階ではまとまりをもち、矛盾・混乱のない学説体系であるが、その後の歴史の展開＝階級対立のなかで相対立する学説を生み出し、更に高次の理論体系を生み出すという観点であった。それにもとづき、入江先生はスミスの『国富論』について、「矛盾、混乱の体系」という通説に対し異説を述べた。入江先生の主張を引用すると次の通りであった。

「古典学派の体系を統一の体系と見るのではなく、内的に矛盾の発生因を含んだものと見る観点、つまり、ある段階で一つのまとまりを有っていた学説体系が、歴史の展開のなかで、相対立する体系群を生み、そのなかから、更に高次の統一の理論体系に転化し、それが階級的な対立を反映して、反権力の体系と権力の体系に分化していく新しい近代が展開されるという観点は、歴史を有意味にとらえるうえで、追求する意味があるのではないか。通説では矛盾、混乱の体系と言われているスミスの体系を、古典学派の創始者スミスの『国富論』体系が、それ自体としては矛盾、混乱を含まない、一つのまとまりをもっていた学説体系だと見る観点でとらえないおす作業が、私の積年の課題である」⁴⁾

そして、この視点から通説の解釈の問題点、誤りを敢然と批判し、特に、アダム・スミスの研究では、マルクスのスミス解釈の誤りも指摘するなど、異説、異端の研究者であった。学会活動（堀研究会、経済学史学会、マルサス学会）についても、熱心であり、飛行機を嫌う先生は、船や汽車で学会に参加し、発表している。

教育活動面では、教養科目・一般教育科目の経済学（後、経済学部基礎教育科目の経済学・マルクス経済学）を教え、専門科目の経済学史、ゼミ1、2、短大（夜間）では経済学を一貫して担当した。そして、真面目な性格上、教育に極めて熱心で、ゼミも延々として続け、サブゼミも行ない、また、学生の自主的研究活動である経済学研究会（後、経済学研究部、経済研究部）を創設し、その顧問となり（1951年～1958年3月）、その一環として資本論研究会を創設し（1953年3月）、また、ゼミ連が結成（1962年6月）されると、ゼミ連を長年にわたって指導された（1964年4月～1992年3月）。さらに、新聞学会の顧問（1955年～1964年3月）もされ、学内の情報発進活動に協力された⁵⁾その結果、入江先生から学問的、人格の影響を強く受ける学生が多数出た。さらに、軟式庭球部（ソフトテニス部）の部長も長らく続けられた（1961年～1993年3月）。みずからテニスをされ、自分からもうやめようとは絶対言われなかった。

大学行政面では、経済研究所所長を1年間、図書館長を2年間、経済学部長を4年間、大学院経済学研究科長を6年間務められた。特に、経済学部と大学院経済学研究科における入江先生の貢献、役割は極めて甚大である。入江先生を身近で見てきた比嘉清松松山大学学長（在任：1998年1月～2000年12月）

4) 入江奨「教員生活最後の年度を前にして」松山大学入江ゼミナールつくし会『つくし』第18号、1頁、1993年3月31日。

5) 経済学研究会は1951年から1958年3月まで、資本論研究会は1953年3月から（いつまでかは確認できない）で、ゼミナール連合協議会は1964年4月から1992年3月まで、新聞学会は1955年から1964年3月まで、軟式庭球（ソフトテニス）は1961年から1993年3月まで（学生部資料より）。

は「教務の入江」と規定し、松山商大単科大学から経済・経営の2学部体制に移行した後、1960年代後半（昭和40年代）に経済学部の教学の基本システム（カリキュラムやスタッフ、教授会規則等）ができあがり、教務委員としてまた経済学部長として学部をリードされ、また、大学院の設置（1972年4月設置）を推進され、大学院の諸規則を作成されたのが入江先生であったことを明らかにしている。入江先生抜きにしては今日の経済学部、経済学研究科は語れないと言える。さらに、人文学部の設置（1974年4月設置）にかんし、学内の雰囲気はかならずしも賛成でなかったが、学部長として経済学部に賛成の方向にもっていかれたのは入江先生であったと、その隠れた功績を指摘している⁶⁾。

学校法人面では、評議員、評議員会議長を長らく務められたが（評議員は1966年4月～1989年3月27日まで。議長は1986年5月28日～1989年3月27日）、法人理事の要請には固辞された、という。思うに、のめり込む性格上、研究ができなくなるためでないかと推測される。

他方、大学の教職員会の活動は熱心であった。委員を1955年、56年、62年、63年、65年と5年間も務め（伊藤秀夫、星野通、増岡喜義理事長時代）、最後の1965（昭和40）年には委員長を務められた。その間、綿密にして周到、多くの要求を出し、多くの文書を出し、教職員の待遇改善に尽力した。

また、社会活動としても、愛媛の自治体問題研究所の立ち上げに尽力され、また、愛媛の進歩的知識人の一員として、安保条約に反対する運動や社共統一の愛媛県知事選挙にも取り組むなどした。

入江先生から学んだゼミ生の林陸弘（1963年3月卒業）は入江先生のお思想について次のように述べている。

「先生の経済理論は、というよりも、その哲学や思想の根底にあるもの

6) 比嘉清松「入江先生のご受賞を祝う」『つくし』第25号、2～3頁、2000年7月。

は、貧困と抑圧、差別や搾取・収奪、暴力、戦争といったおぞましき社会の仕組みを、学生にそれとなく教える事でした。そしてこんな社会が終りを告げる日を希求されていたわけです。

しかし、現代は、この考えは阻害され、迫害され、支配階級から常に監視され、古くなった理論と片付けられる。しかし、現実には正義と民主主義の名の下に核兵器と貧困の蓄積、戦争の正当化など「が進んでいるが」、この理論の正しさを証明しています。先生は陰に陽に、圧力の中で苦闘し、あるいは苦悩しながら、自分の理論の正しさを信じ、強い意志で全うされた。先生の信念を貫かせたのは、人間としての誇りと、人類に対する限らない愛があったらだと思います」⁷⁾

入江先生は1989（平成元）年3月31日、65歳により定年退職され、4月1日再雇用され、5年間の再雇用期間を経て、1994（平成6）年3月31日、70歳で退職された。

入江先生は一貫して松山商科大学で43年間の長きわたり教職を務められ、松山で過ごされた。その間、ゼミを42回担当し、指導生661名、修士7名、博士2名を指導し、育てられた⁸⁾。

そして、退職後、年来のスミス研究を纏められようとしていたが、難病に罹られ、横浜で入院、リハビリをへて、一時お元気になられたが、2005（平成17）年4月12日、横浜で逝去された。享年81歳。

以下、入江奨先生の人と学問について、述べていくことにするが、併せて入江先生が人生を共にした松山商科大学の歴史についても最小限触れていくことにする⁹⁾。

7) 林陸弘「弔辞」『つくし』第29号、2006年1月、17頁。

8) 入江奨「つくし会のみなさんへ」『つくし』第19号、18頁、1994年7月31日。

9) 評伝の性格上、入江ゼミの卒業生の個人名が出てくるが、『つくし』に投稿している人については載せることにした。また、教員名についても載せ、敬称は略した。ご了解していただきたい。

第一章 生誕から松山商科大学就任まで

入江奨先生は1923（大正12）年6月2日、広島県芦品郡新市町戸手1187に生まれた。父は銀行員で、その長男であった。

1930（昭和5）年4月、小学校に入学した。同級生が42、3人の小さな学校であった。小学時代の思い出としては、当時の映画で、アメリカやイギリスから日本が包囲網にあっている、石油が方々から止められている、ということが流されていて、日本は大変なんだなあ、何とかせないかんなあ、という考えを幼な心に植えつけられたという。そして、二・二六事件の年の1936（昭和11）年3月小学校を卒業した。

1936年4月、入江先生は広島県立府中中学校に入学した。中学校に入学するや、いきなり、軍事教練があり、中学に行くときはゲートルを巻いて通い、軍国主義を言葉ではなく、その内容について骨身に染みていたという。そして、1941（昭和16）年3月、府中中学を卒業した。そして、大学に行きたいと思ったが、余り金のかかるところは行けないと思い、その頃、大阪で事業に成功している伯父がいて、伯父の所に下宿すれば飯代はいらないということで、大阪商科大学予科を受験し、合格した¹⁾。

1941年4月、入江先生は広島を離れ、大阪商科大学の予科に入学した。このとき17歳であった。大阪商科大学予科の定員は120名、修業年限は3年で、高等学校にあたる。校舎は大阪市住吉区杉本町にあった。

この時の大阪商科大学の学長は河田嗣郎²⁾であった。当時の大阪商科大学の学部には他の諸大学に比較して民主的、進歩的な研究者がなお存在していた。

1) 「入江奨退職記念 最終講義」1994年1月20日より（松山大学入江ゼミナールつくし会『つくし』第19号、1994年7月31日に掲載）。以下、「入江奨最終講義」と略す。

2) 河田嗣郎は1883年山口県生まれ、京大経済学部教授、社会政策、農業政策の専門家であった。大阪市長の関一の要請で1928（昭和3）年6月、創立されたばかりの大阪商科大学の初代学長に就任した（このとき45歳）。京大時代河上肇とも交友関係にあり、また、1933年の滝川事件で京大法学部を辞職した末川博や恒藤恭を受け入れ、自由主義的な人柄であったが、時局の進展に伴い、国策に迎合していくようになっていた。

例えば、恒藤恭(国際公法, 社会思想史), 末川博(民法), 堀経夫(経済学史), 藤田敬三(経済政策), 福井孝治(経済学原論)などの自由主義者や豊崎稔(統計学, 景気論), 富永祐治(陸運論), 木村和三郎(簿記), 名和統一(国際経済論), 飯田繁(物価論)などの社会民主主義者, 上林貞治郎(工業経営学), 安倍隆一(商業経営学), 岡本博之らの若いマルクス主義者, 等々が居た³⁾。

大阪商科大学予科の主事は末川博(1940年から予科主事)が務めていた。予科の教授陣には, 木村和三郎(簿記), 立野保男(ドイツ語, 演習), 堀経夫(経済学通論, 演習), 末川博(法学通論), 福井孝治(ドイツ語)ら進歩的, 民主的な教授たちも居た⁴⁾。このうち, 立野⁵⁾はドイツ語担当だが, マックス・ウェーバーの研究で学会から注目され, また当時の天皇制イデオロギーの下でハイネやショパンを論じ自由で新鮮な授業を行ない, 予科生徒から大きな人気を集めていた。おそらく, 入江先生も立野講師の講義を受けたものと思われる。

入江先生が予科1年生の, 1941年12月8日, 太平洋戦争が始まった。東條内閣は対米英攻撃の後, 宣戦布告した。戦争開始直後は緒戦の戦果で国民の戦争熱は高揚した。大阪商科大学でも同様であった。河田学長は1942年1月4日の『大阪毎日新聞』に「大東亜共栄圏の盟主, 指導者としてわが国民の今後の責務はいよいよ重大である。軍事は陸海軍がその一切をやってくれるからわれわれはまかせて安心してすることが出来るが, 他方国家指導の下に国民1人1人がみずからあたらなければならない経済活動の部門にこそ, われわれの双肩に課せられた輝かしい任務でなければならぬ」と述べ, 大東亜民族に対する指導国民としての自覚の必要性を強調した。晩年の河田学長の国家に対する使命感は強烈なものがあつた⁶⁾。

3) 上林貞治郎『大阪商大事件の真相』日本機関紙出版センター, 1986年, 18~22頁より。
科目は『大阪商科大学六十年史』大阪商科大学六十年史編纂委員会, 1944年10月, 696~700頁。

4) 『大阪商科大学六十年史』703~704頁。

5) 立野保男は1911年生まれ, 1935年大阪商科大学を卒業し, 研究科生・副手を経て1939年4月から予科のドイツ語の教師となっていた。

6) 『大阪市立大学百年史 全学編上』196頁。

しかし、緒戦の進撃も長くつづかなかった。入江先生が予科2年生の1942（昭和17）年6月、ミッドウェー海戦で4隻の空母を失い、太平洋での制空制海権を確保できなくなっていた。しかし、国民には敗北の真相は知らされなかった。

入江先生が予科2年生のとき、1942年5月21日に河田学長が現職のまま死去した。享年59歳であった。5月28日に故河田学長の大学葬が大阪商科大学講堂で行なわれ、約1,000名が出席した。その時の葬儀に入江先生も出席し、河田嗣郎の同僚で元、京大教授の河上肇も列席し、その顔を見ている。

河田学長死去のあと、次の学長選びがなされ、末川博が候補に挙がったが、文部省が認めないだろうということで、京大教授の本庄栄治郎（54歳）に白羽の矢が立ち、本庄が1942年7月2代目大阪商科大学学長に就任した。本庄は1888（明治21）年京都生まれで、京大助教授をへて1923（大正12）年教授となり、日本経済史を専門としていた。この本庄学長の下で、河田学長時代以上に学校の全体主義化が進んだ⁷⁾。

また、1942年末にはガダルカナル島でアメリカと死闘を繰り返し、大敗北し、翌1943年2月撤退を開始した（戦死・餓死者2万5,000人）。しかし、国民には真相は知らされなかった。

入江先生が予科2年生の終り、1943（昭和18）年の春から勤労働員が強化され、予科生も3月21日から4日間住吉区の粘土掘作業に従事させられた。

4月18日、山本五十六連合艦隊司令長官がソロモン上空で戦死、6月5日に国葬が行われ、大阪商科大学でも運動場で全学遥拝式が行われ、アッツ島の玉碎の発表と重なり、学生の間で悲壮感がただよいはじめた。

入江先生が予科3年生の、1943年の夏にはかつてなく激しい訓練と勤労働員が課せられた。夏休み中に1週間の勤労働員が命じられ、淀川鉄鋼所、久保田鉄工所などへ報国隊員として動員された。休暇があける直前の8月18日か

7)『大阪市立大学百年史 全学編上』198～199頁。

ら20日までの間に1日野外教練が課せられ、休暇あけの8月21日からは勤労作業と訓練が繰り返された⁸⁾。入江先生も勤労働員に駆り立てられただろう。

入江先生の予科在学中の1年から3年にかけて、いわゆる「大阪商大事件」が起きている。以下、この「商大事件」について紹介しておこう。

入江先生が予科1年生だった、1941年11～12月ごろ、予科の立野保男講師の言動が河田学長の逆鱗にふれ、立野は河田学長から予科講師を辞職するよう申し渡され、豊崎稔教授の斡旋で1942年4月から東北大学に移ることになった。ところが、これを聞いた学生が立野留任運動を起こしたのである。そのきっかけは大阪商科大学高等商業部教授（大阪商科大学助教授兼務）の上林貞治郎⁹⁾が学部2年の山崎隆三¹⁰⁾（1940年4月学部入学）に立野転職のことを伝え、山崎から予科2年生の吉村励、崎山耕作（1940年4月予科入学）らに伝えられ、予科2年生を中心に立野留任運動が起きた。運動は予科から学部及び、クラス決議もなされたが、学生の要望は大学当局に容れられることはなく、立野は東北大学に移った。

立野留任運動は目的を達することはできなかったが、この運動を通じて大学の現状に対する批判的な急進的な学生のグループが生まれた。

入江先生が予科2年になった、1942年4月、今度は学部学生を中心とする出席制度反対運動が起きた。出席制度とは従来出席制度のなかった学部において、1942年4月から2年以下に実施するというものであった。多くの学生はそれによって戦時下の学園生活に残されていた自由な時間が奪い去られると感じ、学部3年の山崎隆三や1年上の木村敏男（1939年4月学部入学）らが学生の中心的リーダーとなり、2年の羽岡栄之助（1941年4月学部入学）、木下

8) 『大阪市立大学百年史 全学編上』201頁。

9) 上林貞治郎は1908年12月堺市生まれ、1932年大阪商科大学を首席で卒業（第1期生）し、1933年3月大阪商大副手、1935年2月助手、1936年講師をへて1939年3月大阪高商部教授、商大講師兼務、1941年大阪商大助教授（兼任）。

10) 山崎隆三は1920年4月大阪市生まれ、1937年4月大阪商科大学予科入学、1940年3月同修了、1940年4月大阪商科大学に入学し、学部2年生になっていた。山崎隆三は予科時代、立野講師に心酔していた1人であった。

悦二（同）、白井佐敏（同）、小川喜一（同）らが運動推進の中心となり、1年の林直道（1942年4月学部入学）らにも働きかけ、大学側と交渉し、学部全体の学生大会も2度開いた。堀経夫教授・学生課長が学生の要求を認め、大学側が折れ、出席制度は施行されたが有名無実となり、学生の運動は目的を達した。

この立野留任運動と出席反対運動の過程で、上林貞治郎と学部3年の山崎隆三や木村敏男、学部2年の羽岡栄之助らが親密となり、1942年4月下旬、この4人が大阪市内で会合し、政党組織とは異なる政治組織「ケルン・グループ」を結成した。そして、マルクス主義の理論水準を高めると共に学内の進歩的の学生で研究会や読書会を組織することなどを決めた。その後、ケルン・グループには学部1年の林直道、森龍実、2年の木下悦二が加わり7人で構成された。さらに、1942年12月、木下悦二、小川喜一、平井都士夫、森龍実、吉村励ら7名の学生が奈良公園で会合し、「商大文化研究会結成準備会」なる組織をつくった。それはケルン・グループの外郭組織であった。これ以後、非公然的読書会組織がさらに組織され、参加した学生は約100名にも達した。

しかし、1943（昭和18）年3月15日、大阪商科大学教授名和統一、日本貿易研究所員内田譲吉が大阪府警特高課により治安維持法違反で検挙された。名和グループも内田グループもケルン・グループと直接の繋がりはなかったが、両グループの取調べの過程で、3月30日、ケルン・グループの木下悦二、小川喜一、白井佐敏、渡辺修、森龍実、布井清毅ら6名の学生が検挙され、5月5日には大阪商科大学高等商業部教授（兼大阪商科大学助教授）の上林貞治郎、元経済研究所嘱託の坂井豊一が検挙され、5月27日には東北帝大の立野保男が仙台で検挙され、6月12日には林直道、平井都士夫、吉村励が、11月には一ノ瀬秀文ら23名の学生が検挙された。検挙者に対する特高警察の取調べは人権など全く無視した野蛮極まるものであった。そのため、獄死、精神異常となるものも出た。

さらに、治安当局は大阪商科大学に対し、進歩的と目された何名かの教員の処分を要求した。その結果、11月、本庄栄治郎学長により、木村和三郎教授、

安倍隆一助教授、飯田繁助教授の3教員が強制退職させられた。また、豊崎稔教授も退職に追い込まれた!¹¹⁾

以上の「商大事件」での教員や学生に対する大量検挙・弾圧は、大阪商科大学の教職員・学生に大きなショックを与えた。

この予科時代の生活、読書の状況について、後（1957年11月）に入江先生は次のように回想している。

「予科の頃には経済の本も政治の本も殆ど眼に入らなかった。そんなものは学部で嫌という程に読まされるんだから今は御免だという気持ちで居た。そしてチャチな美学家気取りで寺をさまよったり、西田哲学の書物にうつつをぬかしたり、西田直二郎の日本文化史を悦に入って楽しんだり、時には独歩の思想に共感したり、杏村の偉才ぶりにあこがれたり、また時には直哉などの私小説にうつつをぬかしたり、荷風に親しんだり、ドストエフスキーやトルストイやシラー、モーパッサン等々。思い出してみると、片田舎からぼっと出の私には、見るもの聞くものが砂地に水のように、何でも飛び込んで来ることが出来た。そしてほっとした時に帰って行くところは中宮寺のミロク、平等院にしみこむ古えの魂であり、独歩の乙にすまさんばかりの心地であり、また光太郎のむせびであった。なんのことはない。根なし葛の英雄崇拜がすべてで他に何があったのだろう。リッケルトやカントの哲学に親しんでもニーチェの真の魂は何処かへ吹きとんでしまつて、いざという時に残つて居たものは田辺元の歴史的現実の滅私論だけで、裏はへなへな表は空元気な進軍が始まつてしまった。死に際しての言葉、エス・イスト・グートも、所詮は今にして思うと単なる銜いであり、全くの眉つば物でなかったか。

11) 以上は『大阪市立大学百年史 全学編上』203～209頁。上林貞治郎『大阪商大事件の真相』日本機関紙出版センター、1986年。広川禎秀「大阪商大事件の覚え書き」大阪市立大学文学部『人文研究』第27巻第7分冊、1975年11月。

経済の書物で、征く前に読んだのが難波田春夫の国家と経済であり、高田保馬の貧乏必勝論や民族と経済であったことも今、思い出す。産業予備軍という言葉は未だ僕の耳に入っていなかった。というよりも相継ぐ徴用の波、企業整備、配置転換の国家総動員体制の下では、その言葉の持っている恐ろしさと歴史的意味は、当時の僕には、到底入り込む余地がなかったのだろう。それらの諸現象も当時の僕には全と個の関連の中でしか把握られていなかった。河上肇の顔に河田学長の葬儀の席で接しても、過去の英雄として映るだけで資本論を読むことと結びつきはしなかった」¹²⁾とある。

文中、産業予備軍という言葉が唐突にでてくるが、マルクスの『資本論』の意味であろう。そして、この回想を読む限り、入江先生は予科時代、哲学や文学青年であり、マルクス経済学とは無縁であり、また、「商大事件」とは無関係であったように思われる。

1943（昭和18）年9月25日、入江先生は予科を2年半で修了した。6カ月の繰り上げ卒業であった。本来予科は3年間の筈であったが、東條内閣下、1941年の10月の勅令で大学学部、予科、専門学校の修業年限の短縮が定められ、入江先生の学年は6ヶ月短縮されたためであった。

そして、入江先生は1943年10月1日大阪商科大学の学部に入學した。このとき20歳と3ヶ月余であった。

1943年10月はどんな時期であったか。輸送船の被害が増大し、南方からの物資輸送力が低下し、民需産業の徹底的整理にもかかわらず、軍需生産はこの年をピークに減少し始めた。戦争遂行体制の逼迫はついに学徒の全面動員となった。10月2日、「在学徴集延期臨時特例」の勅令が公布され、文科系の学生・生徒の徴兵猶予が停止された。10月21日に、東京明治神宮外苑競技場で

12) 『松山商大新聞』第77号、1957年11月30日。

出陣学徒壮行会が開かれている。いわゆる学徒出陣である。また、徴兵猶予停止にあわせて、10月25日～11月5日に臨時徴兵検査が行われ、結核患者を除き丙種まで12月に入隊させることが決定された。

そのような戦時体制の真っ只中に、入江先生は大阪商科大学の学部に入學したのだった。授業どころではなかった。直ちに学徒出陣組となった。大阪商科大学の学部生で徴兵適齢に達しないものは第1学年50余名にすぎず、大半が徴兵検査を受けることになった。入江先生も徴兵検査のため広島に帰り、身体は余りよくなかったので、乙種合格であった。

11月4日、大阪商科大学当局は臨時徴兵検査を受けて入営、入団するものに対し、次のような臨時措置を発表した。

「第1、第2学年生にして臨時徴兵検査を受け入営又は入団する者に対しては11月に於て当該学年修了の取扱をなし、除隊帰郷後上級学年に於て修学せしむ。但し其時期並に本人の希望によりては原学年に復し修学せしむ」¹³⁾

このように、一切授業を受けずに1学年を修了する措置がとられた。

11月16日、大阪中之島公園で学校報国隊大阪地方部主催の府下大学高専校出陣学徒合同壮行式が行なわれた¹⁴⁾。入江先生が壮行式に参加したかどうかは確認できていないが、おそらく出席したであろう。

12月1日が入営であった。それまでの期間、入江先生はためになる本を読まなくてはいけないと思い、高田保馬の『貧乏必勝論』を選び、一生懸命読んだ。この高田保馬について、入江先生は退職記念の最終講義（1994年1月）のなかで「今でも思い出してゾッとしますが、貧乏必勝論と、つまり貧乏になるということであれば必ず勝てる、そういう変なことをいった議論であります

13) 『大阪市立大学百年史 全学編上』202～203頁。

14) 同、203頁。

が、それを戦争に行く前に一生懸命読んだ」¹⁵⁾と。

その後、入江先生は台湾に連れて行かれ、航空機での特攻隊員として訓練を受けていたときに敗戦を迎えた。おそらく特攻隊員としてボロ飛行機にのり、死ぬ思いをしたのであろう。以後、入江先生は飛行機に絶対乗らなかった。

1945（昭和20）年8月15日、敗戦により入江先生は台湾で除隊となった。ただ、すぐには復員できず、1946（昭和21）年2月の終わりに鹿児島に帰っていた。しかし、入江先生は台湾でマラリアに罹っており、入院、寝たきりになっていた。その後回復し、5月、入江先生は大阪商科大学に復学した（2年生に）¹⁶⁾

ここで、敗戦後の大阪商科大学の状況について『大阪市立大学百年史 全学編上』により紹介しよう。

1945年9月2日に東京湾内のミズーリー艦上で降伏文書の調印が行われ、以後本土各地に連合国軍の進駐が行なわれた。大阪方面では9月27日、和歌山に上陸した米陸軍第1軍団98師団が進駐し、杉本町の大阪商科大学学舎は米軍に接収された。このため大学は急遽立ち退き先を市内の国民学校に求め、学部・予科は南区の道仁国民学校に移転し、図書館・研究室は南区の大宝国民学校に移転した。そして、新学期は遅れて11月5日から始まった。

敗戦後、大阪商科大学の戦後改革・民主化が始まった。それは本庄栄治郎学長の辞任、恒藤恭新学長の登場、「商大事件」で追放された教員の復帰、戦争協力への反省から学部全教授の辞表提出とその辞表受理、新しい学則の制定などを内容とする一大改革等であった。

11月27日の教授会で本庄学長の辞任が承認され、恒藤恭が1946年1月26日に新学長に就任した。

1946年2月26日の教授会で、「戦争協力を反省し、民主化のため全員辞職し、新方針による大学再建を新学長にお委せしてはどうかという申し合わせ」

15) 「入江獎最終講義」7頁。

16) 同、7～8頁。

がり、全員が辞表を提出し、恒藤学長は戦争に積極的に協力した教員は再任しなかった。

また、戦後の新学則が4月1日制定・施行された（学則改正による）。新学則の要点は、①学部の目的を新時代にふさわしいものに改め、従来の国家主義的色彩を除去し、また「商業に関する学術」をやめ、「学部は大学令により政治経済に関する学術の蘊奥を究め並に其の理論及应用を教授し併せて人格の陶冶に努め以て指導的人材を育成するものとす」とした。②学部の学年を4月1日に始め、修業年限を3年にもどした。③学年制を廃して科目制を採用し、必須、選択の別を廃止して全部選択制とするなどした¹⁷⁾

1946年5月、大阪商科大学の民主化がすすむ中、入江先生は学部2年に復学し、伯父の家に下宿していた。そして大学に通い、ゼミは一谷藤一郎（金融・景気論¹⁸⁾）に入った。

入江先生が一谷ゼミを選んだ理由について、「退職記念最終講義」では次のように述べている。

「この頃の大阪商大の授業というのは圧倒的にマルクス経済学が多かったですね。どっちを向いてもマルクス経済学で、悪口を言うのはですね、あの先生はゴルクスだからなあ、と。ゴルクスと言うのはゴットルとマルクスを一緒にしとる訳ですがね。こういった人もいた訳ですが、そういうような人の処に、私の友達は沢山懂れて飛び込んで行く訳ですよ。

僕はそんないややなあと、つまりあまり人が見向きもせんような処へ入ろうと思ひまして、言うたら悪いんですけども、そういうことで入りましたのが一谷藤一郎という先生の処なんです。一谷先生は金融統制の理

17) 『大阪市立大学百年史 全学編上』222～238頁。

18) 一谷藤一郎は1900年7月京都市生まれ、京都帝大経済学部卒。京都帝大助手、兵庫県立神戸高等商業学校教授をへて、1939年6月大阪商科大学教授になり、金融論を担当（一谷藤一郎博士還暦記念論文集、『大阪大学経済学』第11巻第1・2号、昭和36年10月、より）。ハイエク『隷属への道－全体主義と自由』1944年、の翻訳者として知られる。

論を書かれて博士になられた人なのですが。あれが博士論文じゃそうなどという分厚い本。よく書いたもんじゃのう、とその時は感心して居りましたが、兎も角そこに入りまして、先生と色々話し乍ら勉強した」¹⁹⁾

このように、この時期、入江先生はマルクス経済学とは一線を画し、一谷ゼミに入ったといえよう。ただ、一谷ゼミは自由な雰囲気強く、各人好きなテーマで報告せよということになって、入江先生は図書館の本の山の中に入って、山田盛太郎の『再生産過程表式分析序論』をみつけ、報告した。入江先生は山田盛太郎が講座派の闘士であることを知ってこの本を選んだのではなく、たまたまそれが図書館にあったので報告し、はじめて再生産表式論を知ったという。その後、一谷ゼミではケインズの『一般理論』を勉強することになり、入江先生は『一般理論』を借り出し全部ノートに筆写し、さらに原書を求めて、京都の古書店に行き、自分の蔵書の和辻哲郎『風土』や西田幾太郎の『善の研究』やカントやリッケルトの書物と交換して、原書を入手したという。早くも入江先生の徹底した「原典主義」の研究姿勢が窺われよう。

さらに、入江先生は友人からケインズよりも面白いやつが居るとヒックス²⁰⁾を紹介され、ヒックスの『価値と資本』と一緒に勉強するなどし、卒論もヒックスの『価値と資本』を翻訳した²¹⁾

また、この大阪商科大学学部時代の大学生活、勉学、読書などについて、入江先生は、後、1957（昭和32）年に『松山商大新聞』に次のように記している。

「学生の頃、伯父の家に下宿していたことがある。3年間の空白のあと

19) 「入江獎最終講義」8頁。

20) ヒックス（1904～1989）はイギリスの新古典派の経済学者で、新古典派の価値論・一般均衡理論を発展させ、景気理論や経済成長理論で貢献し、1939年に『価値と資本』を出版していた。

21) 「入江獎最終講義」9頁。

で大学に復帰した最初の時期である。正直なところ、刻一刻と生活の危機を感じさせる裡では、落ち着いて本を読み勉強するなど思いもよらぬことで、絶えずガサガサした明け暮れだった。本も読み度いし単位も出来るだけ多くとらねばならぬし、金欠病の手当もしなければならぬし、と散々の態だった。その様な状況の下で余りカマボコ勉強をし過ぎるのではないかと伯父に忠告されたり、感心されたり、ひやかされたりして、面食らうことが再三あった。読書の話になるといまでもすぐ、その頃のことを思い出して、変な気になったり、考えさせられたりする。本当の読書が出来ていたとはとても思えない。すべてが上つ調子に流れていて、本にかじりつくことで精一杯の様だったことはたしかである。

一谷先生のゼミに入っていたが、それも投げ出し、とうとう高畠詔の資本論をもって、田舎に引揚げてしまった。或る時には山畑の辺で番をしながら同じところを何回読んでもさっぱり解らないままに寝入ったこともあった。全くの苦闘の果てにやっと読了し、充分に呑みこめないままに(今から思うとロビンソン・クルーソー的な読み方に大きな躓きの石があった)、また学校に出て、今度はゼミを中心に角度を変えた勉強を始めた。

僕が近代経済学に接近し始めたのもその頃のことである。杉本栄一先生が精力的にマルクス経済学と近代経済学との関連に関する業績を発表し始められたのもその頃のことだった。ケインズの『一般理論』や、特にヒックスの『価値と資本』を友人と共に一生懸命読み始めた。資本論は棚上げにしておいて。(中略)

戦後、『資本論』から『価値と資本』に眼を転ずるに至った経路の中に、この様な戦前の思想構造が強烈な作用を及ぼしていないという保証はない。

ただ、次の点だけは明瞭である。戦前には殆ど何等の矛盾を感じることもなしに、リッケルトの認識論や観念弁証法(ヘーゲル哲学を周辺とした西田・田辺哲学を核として眼前に展開された思潮)にいと簡単に没入でき

たのに、戦後には、資本論にも仲々ついて行けないと同じ様に、与件経済学にも没入し切る事はできなかったということ。そして読書の姿勢は相変わらず同じものだったということ。更に戦後には労働運動、社会運動、それと結びつく思想が厳しい現実と相接して眼に入るに至ったが、戦前にはそういうことがなかったということ。

すべての面で矛盾を覚えさせられる状況点に立って、僕の読書領域に、やっと経済学史と経済史、就中、経済学史が物凄い圧力をもって入って来るようになった。歴史の勉強は享楽から苦しみが変わってしまった。歴史の世界は知識の宝庫から悩みの源泉が変わってしまった。現在の矛盾に基いて生まれてくる悩みが歴史の世界に投入されたからである」²²⁾

学部学生時代に、入江先生は一谷ゼミでケインズを学んだが、一谷ゼミから逃げ出し、マルクスの資本論を独学で読んだこともあったが、充分理解できず、再びゼミに戻り、ケインズやヒックスを学び、また、当時活躍していた杉本栄一先生に惹かれ、近代経済学の勉強を始め、悩みの末、遂に経済学史の研究に行き着いたようである。

1947（昭和22）年9月、入江先生は大阪商科大学を卒業した。入江先生の卒業論文は先に述べた如くヒックスの『価値と資本』の研究であった²³⁾。当時、未だヒックスの翻訳が刊行されていなかった時で、その翻訳に手間取り、フランス語の部分の翻訳は一谷先生に援助してもらって第3部まで翻訳して卒業論文とした。だから、入江先生の卒業論文は未完のままであった、という²⁴⁾

入江先生の大学の学部生活は、1年5ヶ月に過ぎなかった。しかし、この短い学部時代に、ケインズの一般理論を全部筆写し、勉強し、マルクスの資本論を苦闘しながら読了し、ヒックスの『価値と資本』を翻訳したことがわかる。

22) 『松山商大新聞』第77号、1957年11月30日。

23) 『入江獎退職記念号』の入江獎教授研究業績より。

24) 入江獎「松山の地で還暦を経た者の雑感」『つくし』第17号、1992年6月20日、1～2頁。

驚異的な勉強ぶりである。

大学卒業に当り、一谷先生や父は会社に就職することを勧めた。父からは政治家の秘書の提案もあった。しかし、入江先生は未完の卒論を受理してもらったゆえに、学問の世界への未練が強かった。テオリーエン（剰余価値学説史）未読のまま、『資本論』『一般理論』の間を揺れ動いていた入江先生は、意を決して未知の堀経夫博士²⁵⁾宅を訪問した。現在の自分の問題を解決するために学史研究を行なう他はないと考えるので受け入れてくださいと頼みこんだ。混乱した1947年9月だったから、入江先生の願望は無試験でかなえられた²⁶⁾

入江先生は1947（昭和22）年10月、大阪商科大学の研究科（現在の大学院）に進んだ。

入江先生が堀経夫博士に師事するようになった契機、大学院生活、その後の研究生活について、別の回想（1973年）を紹介しておこう。

「おそらく、昭和二二年の七月か八月のころではなかったか。教室で数回しか経済学史の講義をきいていなかったのに、だから、学史の単位を修得していなかったのに、私は大胆にも、先生の伊丹のお宅に、直接に、何の前ぶれもなく、お尋ねした。そして、研究科での御指導をお願いした。それ以来、大阪商大－いまの大阪市大－には申し訳ないことかも知れないが、伊丹の堀宅が、私の学校になった。私の母校になった。いまでも、お前の学問生活の起点になった母校はどこか、ときかれた時のもっとも自然な、気持ちにピッタリした答えは、伊丹の堀宅ですという以外にない。

私は、先生のお世話で広政経学部に入った。そのため、研究科を「中退」しているが、中退を残念と思ったことは一回もない。それどころか、「中退」したという気持ちになったことさえない。私が『堀学園』の学生

25) 堀経夫は1896年4月函館市生まれ、1920年京都帝大卒。河上肇に師事する。1925年東北帝大教授をへて、1932年大阪商科大学教授になっていた。専門は経済学史、経済思想史、社会思想史であった。

26) 入江奨「松山の地で還暦を経た者の雑感」『つくし』第17号、1992年6月20日、2頁。

である状態は、今もって持続しているからである。いつになったら卒業できるのか、単位を認定してもらえるのか、甚だこころもとない。ヌルマ湯では決してないのだが、アセリもあるのだが、やはり、愚痴の故であろう。なかなか、まともな答案を出すことができないでいる。

私は一谷ゼミ出身である。そして『堀学園』に二五年余も在籍している。『ケインズかマルクス』、『ケインズとマルクス』というような問題にもまれ、ヒックスやヴィクセルなどをカジって、私は目標を古典学派にしぼり、そして、堀先生の門をたたいた。数年で卒業し、実社会に出ようという初めの予定はすっかり壊われ、いつの間にか深みに足をとられた。広島で建林正喜先生の門に入ったことも、一つの原因であったかも知れない。

私は『堀学園』をよくサボっている。そして垢もぶれになって帰っていても、一度も叱られた記憶はない。他所者と言われた記憶も一回もない。教員生活二十余年のなかで、せめて真似たいと思っている第一の点だが、なかなか、その境地に達しえない。どういう訳か。『堀学園』の卒業生にならなければ、その答えは得られないのであろうか。

私は、はじめに、マルサスの『食料高価論』の翻訳を通して、訓練された。スミスの『国富論』の翻訳を通して、教えられた。それ以来、一貫して教えられていることは、いわば『原典主義』である。『内在主義』である。もっとも、これらの用語は、たしか、先生の直接いわれた言葉ではないであろう。けれども、先生のお教えを、これ以外の言葉では、把らえ得ない。私の胸には、こういう形で、刻みこまれている。

たとえば、マルクスーリカアドウーマルクスは、いつしか、リカアドウーマルクスになった。だから、リカアドウーマーシャルにもなった。そして「堀説を超えるリカアドウ研究」という大それた志向も芽生えてきた。勿論、添削を期待し、採点してもらえるとという安心感を伴ってである。

『スミス以前の価値論の研究』というテーマを与えられたのが、昭和二十八年、それ以来二〇年、問題の意味を考え、それらしき業績が次々に現わ

れるのを横眼でみながら、スミス価値論に久しく停滞している。『スミスには労働価値論はなかった』と言うべきではないか、という意見に対して、先生は、通説とは異なるが、そう考えるのであれば論証してみよと言われた(と記憶している)。与えたテーマを先に追究せよとは言われなかった。

先生のこの指導方法を真似たいと考えながら、深慮と学問道に徹することなしには真似がたいことを、痛感している。

と同時に、この指導の厳しさをも痛感している。『真に内在する』とは、ということなのか、歴史を学んでいることが自明の前提になっているだけに、答案を総体的に書く苦しみと迷いは、まだまだ続きそうである²⁷⁾

この一文にみられるように、入江先生は堀先生の門をたたき、指導を受け、深く師事し、「原典主義」「内在主義」に徹し、スミス、リカードウ、マルサス、マルクス、ケインズ、ヒックス等の研究をし、そして、「スミスには労働価値論はなかった」という異説を抱いていたことがわかる。

入江先生は、研究者で組織されている「堀研究会」に出席している。この「堀研」は、久保芳和（堀先生の弟子、1943年大阪商科大学卒、関西学院大学経済学部教授）によれば、1935（昭和10）年ごろ大阪商科大学の堀研究室で始まり、久保が復員して研究会に参加した1946年7月以降、組織的となり、月1回定例開催され、場所は堀先生宅であった。「堀研」のメンバーは1948年5月時点で、大道安次郎、三谷友吉、川村大膳、久保芳和、小谷義次、余田博通、西村孝夫、川口慎二、福原行三、入江奨であった²⁸⁾

そして、入江先生は、大学院生時代、この「堀研」で、1947年12月14日「ケインズについて」、1948年3月7日「マルサス」、6月20日「テーマ不明」、8月1日「ヒックスの限界生産力説について」、と4回ほど発表している²⁹⁾

27) 堀経夫博士喜寿記念事業委員会『経済学の研究と教育の五十年』世界保健通信社、1973年、627～629頁。

28) 同、743頁。

また、この大学院生時代に入江先生は堀経夫博士指導の下、ロバート・マルサスの『マルサス食料高価論』を翻訳した。その翻訳を通じ、入江先生はマルサスの「異色ある価値論たる需要供給説」（単純な需要供給説ではなくて、特に需要の側に重きを置く異色あるもの）を学んでいる。そして、入江先生は1949年1月、堀経夫先生との共訳で創元社から刊行した³⁰⁾

また、入江先生は大学院時代に、1947年10月神戸市立第二中学校講師（～1948年3月）、1948年3月大阪府立生野高等学校教諭（～1948年12月）で英語の教員として教鞭をとり、大学院生活を送った³¹⁾。そして、英語の教員なら原書ぐらい読まないかと思ひ、ジェヴォンズの「THEORY OF POLITICAL ECONOMY」を勉強した³²⁾

1948（昭和23）年12月入江先生は大阪を去った。入江先生の大学院修士課程生活は1年3ヶ月であり、中途退学であった。そのため、入江先生は修士論文は書いていない。

1949（昭和24）年1月、入江先生は堀経夫先生の紹介で、広島大学設定期成同盟会嘱託となった。この期成同盟会というのは、広島の旧制の諸学校（広島高等師範学校、広島文理科大学、広島工業専門学校、広島高等学校、広島女子高等師範学校、広島師範学校、広島青年師範学校、広島市立工業専門学校）を統合し、新制広島大学を結成せんとする期成同盟会（1948年1月12日結成）で³³⁾、入江先生は大学昇格の仕事に従事した。

入江先生は、新制広島大学開設の仕事の傍ら、研究を続け、2月13日には、「堀研」で J. Ray, The sociological theory of capital について報告している³⁴⁾

29) 堀経夫博士喜寿記念事業委員会『経済学の研究と教育の五十年』世界保健通信社、1973年、743頁。748～749頁。田中敏弘「経済学史研究会の回顧と展望－第200回例会を記念して－」関西学院大学『経済学論究』第64巻第2号、10～25頁。

30) 堀経夫・入江獎共訳 ロバート・マルサスの『マルサス食料高価論 その他』創元社、1949年1月。

31) 『入江獎退職記念号』の略歴、『松山商科大学大学院設置認可申請書』より。

32) 「入江獎最終講義」

33) 『広島大学二十五史 包括校史』1977年1月。

また、入江先生が広島に移った当座、堀先生から「お前、国富論の翻訳をせい」と言われ、国富論の翻訳を行なった。半年位で翻訳した。驚異的である。それを堀先生に送って、堀先生が朱を入れて、堀経夫訳で『国富論Ⅰ』〔古典経済学叢書〕として、1949年9月30日、春秋社から出版された。堀先生は訳者序に「原稿の整理及び校正に当って商学士入江奨君の絶大な援助を得たことは、身辺極めて多忙な私をして比較的速やかに本書を出版せしめ得た所以であって、これ亦私の深謝して已まないところである」³⁵⁾と入江先生に深謝しているが、それは原稿整理と校正に関しであり、翻訳についてはなにもない。堀先生からは「入江奨殿 色々尽力有り難う」という返事がきただけであり、入江先生は後(1994年1月)に「流石に堀先生」だと述べている³⁶⁾。

また、入江先生は、この広島時代に、建林正喜先生³⁷⁾が広島市立工業専門学校(後、広島大学工学部)にいて、どういうわけか気があって、その私塾生となり、建林先生宅をとぶらい、焼酎を呑みながらマルクス、ケインズ、ヒックスを議論しながら、資本論について一生懸命に勉強した。入江先生がマルクスの資本論研究を本格的に始めたのはこの建林教授の影響が大きいといえよう³⁸⁾。

1949(昭和24)年5月31日に、新制広島大学が誕生した。政経学部(新設)、文学部、理学部、工学部、水畜産学部、教育学部、理学部、工学部、の6学部からなる総合大学であった。

1949年8月、入江先生は広島大学政経学部の助手に採用された³⁹⁾。

34) 田中敏弘「経済学史研究会の回顧と展望－第200回例会を記念して－」関西学院大学『経済学論究』第64巻第2号、10～25頁。堀経夫博士喜寿記念事業委員会『経済学の研究と教育の五十年』世界保健通信社、1973年11月、749頁。

35) 堀経夫訳『スミス 国富論Ⅰ』春秋社、1949年、3頁。

36) 「入江奨最終講義」12頁。

37) 建林正喜は1909年3月山口県生まれ。神戸商業大学卒業。1934年4月昭和高等商業学校教授、1941年5月彦根高等商業学校教授、1944年5月京城経済専門学校教授、1948年4月広島市立工業専門学校教授、1951年4月広島大学工学部兼政経学部教授。

38) 「入江奨最終講義」10頁。

39) 『入江奨退職記念号』の略歴、『松山商科大学大学院設置認可申請書』より。

1950（昭和25）年3月，神戸大学教授で且つ広島大学教授となった坂本弥三郎教授⁴⁰⁾のもとで研究した⁴¹⁾

1951（昭和26）年1月5日，入江先生は多恵子さんと結婚した。

第二章 松山商科大学教員時代

第1節 松山商科大学—教員時代（1951年3月～1973年3月）

1) 1951（昭和26）年度

1951年3月，入江先生は，松山商科大学（以下，松山商大と略す）の経済学史の担当の講師として就職した。このとき，入江先生27歳であった。

松山商大は1923（大正12）年4月設立の松山高等商業学校（1944年4月からは松山経済専門学校と改称）を新制大学に昇格させて，1949（昭和24）年4月に設立され，開学3年目に入っていた。松山商大は商経学部の単科大学で，学科は経済学科と経営学科の2つであった。定員はそれぞれ100名であり，学長は伊藤秀夫¹⁾であった。

ところで，何故，入江先生は松山商大に就職したのだろうか。それは，当時，広島大学から松山商大に非常勤で経済学を教えていた建林正喜先生の推薦，世話であった。その事情について，入江先生は「最終講義」の中で次のように述べている。

「昭和二十六年一月五日が私の結婚式です。その前，昭和二十五年，時

40) 坂本弥三郎は1894年4月広島県生まれ，神戸高等商業学校卒業。神戸高等商業学校教授，神戸商業大学教授，神戸経済大学教授等を歴任。1949年3月神戸大学経済学部長。1950年3月広島大学教授併任。専門は経済学史。

41) 『松山商大新聞』第38号，1952年4月30日。

1) 伊藤秀夫は1883年9月松山生まれ，早稲田大学文学部哲学科を卒業し，北予中学校，松山中学校の教諭をへて，1926年9月松山高商教授，1944年4月松山経済専門学校教授を経て，1947年2月同校長となり，松山経専を松山商大に昇格させ，1949年4月松山商大初代学長に就任。リベラリストであった。伊藤秀夫については拙著『伊藤秀夫と松山商科大学の誕生』SPC出版，2018年7月参照。

は朝鮮動乱という時に、恋だけは盛んに咲いたことだと思ひまして、とうとう彼女と結婚する羽目になった訳ですが…。

その前に、私は当時広島政経学部の助手だったですね。月給はこれだけで、まあ二人で生活したら、下宿代は幾ら幾らで、生活出来ると思っていたら早速金が足らんですよ。

私、幸いに女房が貧乏生活に強い女でございまして、金がなくなる前に何を買ったかと言いますと、味噌と米を買った。まあ金が無くなったが、味噌と米があるから大丈夫だと、こういうことですね。結構飯だけは喰わして貰いましたが、しかし何時まで経ってもこれでは亭主の沽券に関わるという、『何かええ道ないでしょうか。建林先生どうしょうか』『ならええ道世話してやろう』てなことで、丁度その頃先生は松山商科大学に兼任教授で来ていらっしゃるしまして、担当が数理経済学とか経済原論とかなんかです。『わしはこういうことやっとなんで、松山商科大学へ行け』と。『松山商科大学っていうのがあるんですか』、まあ松山という処を知らなかったんですから、『あるんですか』って。『それはあるさ。わし行っとなんだから』ということで（笑）、『まあそこに世話して下さい。兎に角明日の飯を喰わさにゃきゃいかなので』と。その時教務関係の部長が太田先生で、建林先生とはお友達なんで、『先生何とかしてくれますか』。で、校長先生が伊藤先生。白髪の先生でしたが、まあ建林先生が言うんだから入れてもいいなあというんで、私と一月五日に結婚した訳ですが、トントン拍子に話が進みました)²⁾

文中、太田先生とは太田明二教授で、建林教授と同じ学校（神戸高等商業学校）の同窓生（太田先生が1学年下）であり、また、京城高等商業学校・経專時代も同僚であった（太田先生は1942年8月～1946年5月、建林教授は1944

2) 「入江奨最終講義」10頁。

年5月～1946年5月）。

松山商大に赴任された入江先生は、学校の西側の校宅に入居された。

入江先生が就職した当時の松山商大の校務体制は、学長が伊藤秀夫、教務課長は太田明二（1949年4月12日～1957年4月30日）、学生課長は古茂田虎生（1948年1月13日～1952年5月30日）、庶務課長は増岡喜義（1943年3月1日～1952年6月30日）、図書館長は星野通（1949年7月1日～1957年4月30日）で、伊藤学長を支えていた³⁾

また、法人面では、1951年4月1日、私立学校法が施行され、学校法人制度となった。伊藤秀夫は学長・理事長となった⁴⁾。理事は星野通（1946年12月～）と大鳥居蕃（1947年9月～）が務めていた。

さて、入江先生が就職した1951（昭和26）年度の入試は3月中旬に行なわれた。志願者は602名で前年度の330名に比し大きく増えた。

4月、入学式が挙行され、337名が入学した。経済学科は176名、経営学科は161名であった⁵⁾

入江先生赴任時の松山商大商経学部の教授会構成員は次の通りである（生年月、学歴、赴任年、授業科目）。

学長

伊藤秀夫（1883年9月，早稲田大学卒，1926年9月）

教授

古川洋三（1898年7月，関西学院高商部，ウイスコンシン大学卒，1923年4月，英語，交通論，保険論）

星野 通（1900年10月，東京帝大卒，1925年4月，民法第1部，2部，3部）

大鳥居蕃（1901年5月，東京商大卒，1925年6月，国際経済論，国際金融論，商業政策）

3) 『六十年史（資料編）』128～129頁。

4) 『松山商大新聞』第31号，1951年7月3日，『三十年史』232頁。

5) 『三十年史』232頁。

- 増岡喜義（1903年12月，九州帝大卒，1929年5月，財政学）
- 川崎三郎（1900年9月，東京商大卒，1934年10月，経営比較）
- 浜 一衛（1909年9月，京都帝大卒，1938年4月，第二外国語・華語）
- 古茂田虎生（1902年10月，東京商大予科卒，1941年4月，英語）
- 太田明二（1909年5月，神戸商業大卒，1933年6月，景気論，会計学）
- 伊藤恒夫（1912年1月，京都帝大卒，1948年3月，倫理学，教育学）
- 重松俊章（1883年11月，九州帝大卒，文学士。元九州帝大教授。1949年4月，歴史学，文化史）
- 根岸正一（1889年1月，神戸高商卒，小樽高商，高松高商，福知山高商教授等。1949年4月，原価計算，会計監査）
- 藤本貫一（1893年5月，大阪高等工業学校応用化学科卒，工学博士。住友鉱業別子鉱業勤務を経て大阪ペイント研究部長。1949年4月，化学）
- 上田藤十郎（1899年11月，京都帝大卒，京大農学部講師，昭和商教授，大阪女子経済専門学校教授，名古屋市史編纂主任等。1949年4月，経済史概論，日本経済史）
- 山下宇一（1899年12月，東京商大卒，商学士，元大分経専教授。1949年4月，銀行論，金融経済学）
- 八木亀太郎（1908年10月，東京帝大卒，文学士，元東海大学教授。1949年4月，文学，ドイツ語）

助教授

- 山内一郎（1903年1月，九州帝大卒，1947年3月，英語）
- 二神春夫（1909年3月，九州帝大卒，1947年9月，英語，実用英語）
- 五島 伝（1905年12月，日本体育専門学校卒，1948年9月，体育）
- 菊池金二郎（1905年7月，東京商科大学卒，兵庫県立神戸経済専門学校教授。1949年4月，簿記実践）
- 大野武之助（1889年10月，松山中学卒，今治中学，松山中学教諭等歴任。1950年4月，教科教育法，英語）
- 岩本 猛（1908年5月，1929年3月文部省指定日本体操学校高等科卒，愛媛県立師範学校教授，松山南高等学校教諭等歴任。1950年4月，体育）

講師

高橋 始（1899年4月，早稲田大学卒，1926年4月，政治学）

三好俊夫（1921年10月，神戸商業大卒，1946年11月，生産管理，労務管理）

越智俊夫（1924年1月，東京帝大卒，1946年12月，商法2部，社会法）

作道洋太郎（1924年9月，九州帝大卒，1947年9月，社会思想史）

高村 晋（1907年11月，京都帝大法学部卒，元京城経専教授。1949年4月，法学）

松木 武（1914年11月，京都帝大理学部卒，1949年4月，数学，統計学，商業数学）

山本謙一（1919年9月，経済学士，元松山語専教授。1949年4月，英語，実用英語）

岡本真一（生年月不明，東京商大卒，元神戸経専教授。1949年4月，貿易論）

山根忠恕（1922年，1945年神戸経済大学卒，1950年4月，会计学，会計監査）

今井源良（1887年12月，東京帝国大学法律科卒，朝鮮銀行勤務をへて弁護士開業。1950年4月，商法）

広田喜作（1900年5月，京都帝大文学部卒，1950年4月，フランス語，文学）

研究員

元木 淳（1922年2月，東京商大卒，1949年3月，財務管理，簿記実践）

井上幸一（1921年7月，神戸経済大学卒，1948年松山商業学校教諭。1949年5月）⁶⁾

このうち，経済学科の専門教員は，古川洋三（52歳），上田藤十郎（51歳），大鳥居蕃（49歳），増岡喜義（47歳），太田明二（41歳），作道洋太郎（26歳）で，入江先生は作道講師に次ぐ若い教員であった。

赴任年度の入江先生の授業科目は経済学科の専門科目の経済学史である。一般教養科目の経済学は開校以来，広島大学の建林正喜教授が1949，1950，1951年度と非常勤で担当しており，1952（昭和27）年度から入江先生が担当することになった⁷⁾。なお，演習（ゼミ）はこの年度は担当していない（募集はす

6) 『松山商科大学申請書類』、『三十年史』の「補遺 松山高等商業（経済専門）学校，松山商科大学現（旧）教職員名」，『三十年史』84～85頁など。

7) 『六十年史（資料編）』145～149頁。

に終わっていたためだろう)

この年、特筆すべきことは、入江先生が指導するようになる経済学研究会が結成されたことである。入江先生の調査によると、「経済研究部創始開始期推定の諸作業の結果を総合すると、こうなる。二六年度（小寺広道の学年）に経済学研究会（学友会公認前の組織）誕生」⁸⁾とある。小寺広道は1949年4月入学、1951年4月太田ゼミに入り、1953年3月第2回商経学部を卒業した学生で「経済研究部」所属と温山会（同窓会）の『卒業者名簿』にある⁹⁾。おそらく、経済学研究会は太田ゼミの小寺が3年生になって結成したのだろう。

入江先生は、この小寺らの経済学研究会を指導するようになったようだ。1951年4月に入学した菅晴美（1953年4月入江ゼミ）の回想を紹介（大要）しておこう。

「〔入学〕当時、本館の屋上には俗称『高天原』と呼ぶ一室があり、学友会の社研・経研・雄弁が同居していた。私が出入りを始めたのは入学直後、雄弁会に入会したからである。俗称の一室は、インテリ猛者の激論が飛び毎日であった。何故か経研・雄弁のメンバーは少なく、しかも大半の者は他サークルを兼ねていたから有名無実に近い状態であった。詳細は省略するが、この後、私は紆余曲折をしながら、次第に経研・雄弁の責任を持つようになる。

メンバーが少ないと活動も研修も不十分、烏合の集と化す。メンバーが增強されて合目的集団となる。つまり、『経研』発展の出発点は先ずメンバーを集めることであった。入江先生を顧問に迎え、メンバーを集め、活発な話あいを進め、課題を見つけ、やがて学究の徒にふさわしい『経済学研究会』の誕生となる。

期せずして全員参加の取り組みが始まり、その結果得た成果が学園祭で

8) 入江奨「学生の自主的研究活動の動向の一齣」『六十年史（写真編）』247～248頁。

9) 『温山会卒業者名簿』49頁。正確には「経済学研究会」。

発表となる、私は『近代経済学誕生の系譜』の対策を転じ。大勢の質問者、熱心な問答の遣り取り、会場の下馬評は上々。その出来映えと『経研』の存在が認められた証左であろう。当時を彷彿とさせる写真は今も大事にしまっている」¹⁰⁾

ここから「経済学研究会」の顧問は入江先生であったことが判明する。

4月30日、田中忠夫（前、松山高商・経専校長）の公職追放が前年10月に解除されたので、伊藤秀夫学長は田中忠夫を松山商科大学教授に復帰させている。

6月、新進の作道洋太郎講師（経済史）が大阪大学の宮本又次の推薦で、大阪大学経済学部の手元に採用され転任した。わずか4年たらずの勤続であった。その結果、経済学科では入江先生が一番若い教員となった。

1951年6月、入江先生は『松山商大論集』第3巻第2号に「自由放任主義批判としてのジョン・レイ」を発表した。最初の活字論文であった。

ジョン・レイ（John Ray 1796－1872）はスコットランドに生まれ、Aberdeenの大学で学位を取り、1821年カナダにわたり、オンタリオ州の一私立学校の教師をしたが、それも1832年に辞め、モンリオールで経済学の著述に没頭した。19世紀のアメリカ経済は先進国から新技術を導入して産業を発展させると共に政府の助力・保護政策を必要としており、アメリカの経済学もイギリスの古典派経済学ではなく、保護主義を主張する国民主義的経済学が大きな潮流であった。レイもその一人であった。

レイはいう。スミスの学説は個人的利害と国民的利害が同等なものであるという命題から成立し、また、個人は自分のことを一番よく知っているのだから個人の経済的自由を認めることが国富増大の最良の途で、国家は経済に干渉すべきでないと言うのであるが、その命題は「自明の真理」とは言えない。なぜ

10) 菅晴美「思い出の青春『経研』」『つくし』第18号、1993年3月31日、2頁。

なら、個人的富の増進の手段は獲得であるが、国民的富の増進の手段は創造であり、とりわけ発明であり、決して同じものでないからである。

入江先生はこのレイのスマス批判の妥当性、限界、歴史的意義を考察している。即ち、スマスは富の増大は利己心を基軸とし、レイは国家の積極的関与による発明を重視するが、それは封鎖体系の下であり、開放体系の下では新技術の輸入がなされるので、レイのスマス批判は成り立たない。しかし、国家が新製造業、新技術の導入を促進すればより速やかに総体的な資本蓄積が行なわれるので、その限りレイのスマス批判は成立する。ただ、その「成立」は消極的であろう。にもかかわらず入江先生は、レイのスマス批判を敢えて許容している。それは、レイの経済学の中に「歴史性」、レイを「アメリカ国民主義経済学者の一人」として位置づけるからである¹¹⁾

入江先生は『松山商大新聞』第30号（1951年6月20日）に「ケインズ経済学と価値論－価値論史への覚書－」を掲載した。それは次の通りで、ケインズの価値論の有無を問題にした覚書であった。

「(一) 問題の所在

経済学体系の正常な在り方は、経済現象解明の為めの基本的統一的立脚点としての『価値論』を有つことだと言はれる。その場合『価値論』とは、生産、交換、分配、の統一原理である。

成程価値論史上には、労働価値説、生産費説、需要供給説、限界効用説或は選択理論等々があり、それに従つて種々の分派が生じている。にも拘らず従来殆どすべての経済学がとにかく『価値論』を有つて居り、少くとも価格の統一的説明原理を有つていた。だがケインズの体系ではその様な『価値論』が明示的には見出されない。何故か、『価値論』が前提されている為めであるかどうか。若し前提されているとすればそ

11) 入江奨「自由放任主義批判としてのジョン・レイ」『松山商大論集』第3巻第2号、1951年6月。

れは如何なるものか（巨視的分析法の限界の問題）。ところでケインズ体系では経済諸量を総体的に表示する為に賃銀単位なるものが考へられており、然かもそこでは複雑労働の通常労働への還元の問題が取扱はれている。然らばその点を手掛かりとして、『一般理論』を労働価値説に結びつけることは出来ないか。凡そ斯様な二つの問題がこの主題から汲みとれる。ここでは主として後者について考へて見よう。

（二）賃銀単位の問題

ケインズは其の体系に於ける社会的経済諸量表示手段として、貨幣的表現を斥け、賃銀単位での表現方法を選び、其の根幹の一として労働単位を持ち込んだ。そして労働をば技術、自然的資源、資本設備、有効需要の所与の環境の下に於いて作用する唯一の生産要因と見做すことが望ましいとなし、その意味で前古典派（スミス達）の体系に同情を示しつつ、労働単位をば吾々の経済体系に於いて必要な唯一の物理的単位とすることが出来たのは一部分斯様な事情によってゝあるとしている。他方スミス・マルサス・リカアドゥ・マルクス等は、価値尺度として、概説的に言って兎角『労働』を選んだ。そして交換価値決定論としては、マルサスは需給説を、スミスは生産費説を、リカアドゥ・マルクスは投下労働価値説を採った。然らばケインズの交換価値決定論を迂回したにしても（蓋し右に述べた部分はそれに触れていない故）、少なくとも価値尺度論に於いては、彼等と共通したものをケインズは有っているのではなかろうか。

尤よりこの問題に就いての適確な見解を証示する為めには、両者の吟味を経由しなければならぬが、予備的見解を示せばこうである。即ち、彼等の間では労働を本源的な最初の購買貨幣と見做す見解が基礎となっていた。彼等の言う労働はスミス流に言つての生産的労働であり、貨物の交換価値の従つて相対価値の数値を表示する手段＝価値尺度とされたのもその様な労働である。ところがケインズの言う『労働』の中には企

業者並に彼れの助力者達の個人的勤労が当然のことゝして含まれて居り、然かもその労働は生産諸条件一定の前提の下に於いてのみ唯一の生産因と見做されるに止まる。そして彼れの社会的経済諸量の表示手段は、『労働』自体ではなく、彼の所謂労働単位と貨幣価値との統一物にたる賃銀単位である。それは言はゞ社会的に必要な平均の貨幣賃銀である。更にそれは『単位』とは言ひ乍ら、あらゆる経済量の必然的な数値測定 of 用具ではなく、国民所得や社会的総産出量の如き総体量の増減態様を雇傭量に係せしめて示すべく要請されている、言はゞ函数関係の表示手段たるに過ぎず、それは個別的産業の産出量の如きものに就いては必ずしも適用されるを要しない。

彼が主として問題にしたのは、総需要函数上昇の期待に応ずる雇傭量の増大、社会の総産出量の増大である。彼は総産出量の増大は一定の生産諸条件により大なる雇傭量を附加することによって実現するものと考へた。従つて彼は産出量の絶対的大いさを問題にしなくてもよかった。社会的総雇傭量数量的な統一的把握と其の増減に応ずる総体量の増減の具象的且つ統一的把握だけが必要であつた。そしてケインズの言う純粹理論とは因果分析であり、そのために経済諸量の完全な明確さが要請され、ために確実な単位、基準が必要であつた。前者については労働単位が其の同質性の確認を媒介として役立つ。後者については、貨幣価値の同質性の確認を経由して労働単位の貨幣賃銀たる単位が利用可能なものだとされる。何故であるか。それを何故選ばざるを得なかつたのか。彼れの場合因果的増減態様自体が問題であるに過ぎなかつたから。経済諸量が貨幣的表現をとっているから。彼れの体系内では一般的物価水準なる概念が無効であるから。実物的統一手段が存しないからである。

然らば一方で貨幣価値の同質性を挙げ、他方で一般物価水準を斥ける理由如何。結局彼は貨幣価値を特別扱ひにしそれ自体の同質性を問題にしその意味で確定的なものとなしたに過ぎない。若し然らずとすれば賃

銀単位の要請は必然的なものとはならぬ。とは言へ若し彼がたとへば小麦を単位として選ぶならば単位と経済諸量との間の統一が保てぬ。それ故に右の如き賃銀単位が要請せられた。かくてその貨幣価値は一見両者を結ぶ中項機能を果す相をとり乍らも、一方では労働生産力を資本の生産力へ還元せしめる媒介となって労働単位の同質性を確認せしめ、他方では彼れの理論構造に入り込んで貨幣ヴェール観を排除すべき用具となる。

早急に結論すれば、彼の理論体系は本質論に雇傭理論で無ければならなかったし、他方その単位は労働をば価値尺度と見なすものゝ、それとは質的に異り、少くともその点に於いてケインズは労働価値説と離れる。

（三）ケインズ価値論

価値論有無について論断を下す余裕は今ないが、この問題について考へるべきところを示せばこうである。彼は価値論を需給説の側から眺め、彼の所謂従来 of 価値論者の貨幣論の取扱ひ方に不満を示し、その欠陥を斥けるため、彼の所謂価値論の理論構造の中貨幣を基本的なものとして持ち込み（期待の理論）、両者の統一せられたものを以って巨視的理論構造を構成し、以って有効需要の原理の根幹としている。言はゞ総供給函数と総需要函数との相互関係の中に彼の価値論は投げ込まれ姿を消している。だからそれを考究する為めには、その箇所と其の価格理論とを特殊的に対象とする必要がある。

（本稿では全般的に、殊に（二）に関して、未だ追求し足りないところが多分にあることを断つておく。暫定的考察に過ぎない。）（筆者 本学講師）¹²⁾

1951年9月、入江先生は『松山商大論集』第2巻第3号に「ジョン・レイ

12) 入江獎「ケインズ経済学と価値論－価値論史への覚書－」『松山商大新聞』第30号、1951年6月20日。

の資本理論」を執筆した。前号の続きであった。この論文において、入江先生はレイの独特の資本理論=instrumentなる概念を紹介し、その特徴を析出し、その問題点を指摘した。レイの理論の問題点とは、第1に、生産されるものはすべてinstrumentであり、消費財を生産しているか、生産財を生産しているかは殆ど問題となっていないこと。第2に、財に対する需要量が全然考慮されていないこと。第3に、分配論が殆ど考慮されていないこと。第4に、貨幣の特殊性が考察されていないこと。第5に、長期理論にとどまり、経済的には静態論にとどまっていること等である¹³⁾

この論文について、入江先生は後に「スミサーレーパヴェルクの流れの中に位置づけられるという判断を形成しながら、レイの資本理論の特殊的構造の解明に力点をおき、インストゥルメント概念から経済的発明論に至るその論理の構造とその理論の実物的性格を究明している」と述べている¹⁴⁾

1951年10月6日、伊藤秀夫理事長ら大学当局は、文部省に対し、松山商科大学短期大学部（以下、短大と略す）の「設置認可申請書」を提出した。夜間の短大（商科第2部）で定員100名、修業年限2年半、であった。入江先生は短大講師に貼り付けられ、申請された¹⁵⁾

1951年12月、入江先生は堀経夫監修『経済思想史事典』創元社に「雇庸問題」を執筆している。この著書は『事典』となっているが、目次をみれば明らかなように、経済学史の教科書であり、研究書である。目次と執筆者は次の通りである。堀研究会の会員が中心となり執筆していることがわかる。

「序章	古代及び中世経済思想	高橋誠一郎
第一章	重商主義	久保芳和、小谷義次

13) 入江奨「ジョン・レイの資本理論」『松山商大論集』第2巻第3号、1951年9月。

14) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

15) 前掲『伊藤秀夫と松山商科大学の誕生』参照。

第二章	過渡期の経済思想	堀経夫, 大道安次郎, 小谷義次, 久保芳和, 久保田明光
第三章	重農学派	久保田明光
第四章	人口論史	堀経夫, 川村大膳
第五章	古典学派	堀経夫
第六章	第十八世紀における英国土地公有論	西村孝夫
第七章	イギリス社会主義	堀経夫, 松田勇, 大前朔郎, 西村孝夫, 大道安次郎
第八章	フランス社会主義	松田勇
第九章	古典学派の学説の仏・独・米への流入	大道安次郎, 山川義雄
第十章	米国における国民主義経済学	大道安次郎
第十一章	ドイツにおける国民主義経済学	堀経夫
第十二章	マルキシズム	越村信三郎, 古澤友吉
第十三章	新歴史学派（講壇社会主義）	小谷義次
第十四章	限界効用学派	三谷友吉, 安田信一, 小谷義次, 入江獎
補 章	特殊問題	
	方法論史	西川清治
	貨幣理論の問題	安田信一
	雇傭問題	入江獎
	計画経済の問題	福原行三
	経済変動理論の発展	杉浦一平

」¹⁶⁾

さて、入江先生が執筆した「補章 特殊問題」の「雇傭問題」は、約6万字の長文である。それをまとめれば、大要次の如くで、ケインズとその後の雇用

16) 堀経夫監修『経済思想史事典』創元社、1951年12月。

理論を取り上げたものであった。

「一、緒論

19世紀末葉以降世界資本主義は度重なる恐慌に襲われ、その疾病の集中的表象が慢性的大量失業であった。それを反映して、経済学、経済理論の側において失業現象の解明が要請され、その光明を齎すが如く出現したのが、ケインズの『雇傭、利子及び貨幣の一般理論』である。それは失業の原因を問い、失業救済を問うことから、雇傭量の決定因子、雇傭量増大策、完全雇傭達成の方法を問う研究はケインズによって開拓の端緒が与えられた。本編ではケインズ及び彼以後における雇傭理論を解明する。

二、雇傭理論前史

産業革命の前夜に生まれ出た経済学の祖アダム・スミスの『国富論』は生産力の増大に主眼が置かれ、産業革命の進行過程に生まれ出たマルサス、リカードは、問題意識の相違によってマルサスは貧困の問題を人口理論によって、恐慌の原因を有効需要不足に求めたのに対し、リカードは富の分配原理の探求に向けられた。そして、経済学の歴史はマルサスの方向では無く、リカードの方向を辿り、ジョン・スチュアート・ミルに継承され、限界効用理論の洗礼をうけながらアルフレッド・マーシャルの手によって、新古典派として完成した。リカード、ミル、マーシャルは、貧困問題や国民所得の生産よりも基本的に分配問題に注視した。そのため、彼らは失業、雇傭理論を展開することはできず、それはケインズの出現を待たねばならなかった。

三、雇傭理論の展開

リカード、ミル、マーシャル、ピグウ等の古典派（正統派）の経済理論が完全雇傭を想定し、その均衡状態における経済諸量の相互関係进行分析するのに対し、ケインズは不完全雇傭を前提とし、その上に成立す

る均衡状態における経済諸量の相互関係を分析した。ケインズはピグウとともに正統学派マーシャルの弟子であるが、ケインズは正統派の反逆児である。

ケインズは正統派のピグウの『失業理論』の批判を通じて、その理論を展開している。ピグウの失業理論には、非自発的失業が含まれておらず、貨幣的要因に独立性を認めず、失業の本質をつくことができなかった。

それに対し、ケインズは実質賃金が低下しても需要さえあれば雇用量は増大する、現存の慢性的失業の原因は労働需要の欠如であり、それは有効需要の不足にあるとし、有効需要の理論を樹立した。ケインズは経済学史的にはマルサスの古典的有效需要論を近代的理論によって再現発展せしめたといえる。

四、完全雇傭政策

20世紀以降度重なる恐慌と失業の増大に直面し、各国は公共事業政策を採用し、また失業保険制度等の社会政策に取り組んだ。アメリカではニューディール政策が実施された。その場合にできたのが「完全雇傭政策」である。その中で、英国では1944年にビヴァリッジの「自由社会における完全雇傭」が出されたが、それはケインズの『一般理論』に裏付けられて現われたものであった。

五、結言

ケインズの出現以来マルクス経済学との関連性を取り上げる論者（クライン、ロビンソン等）もいる。マルクス経済学にとっては、失業を産業予備軍として把握し、資本主義の内部から必然的に流出する構成的なものであると看破してきており、すでに見ふるされたものであろう。筆者はここで両学派の対立の絶対性、あるいは結合の可能性について論ずる意思は持たない。

本論を結ぶに当たって筆者は経済学の一部門としての雇傭理論は、そ

れが雇傭問題への鍵を準備すべき実践的要請を帯びている限り、依然として分配的諸問題と密接な関係に置かれる筈だということである」¹⁷⁾

この論文の概要について、入江先生は後に、「ケインズおよびそれ以降の経済理論の一部門としての雇傭理論の展望に視点をおき、経済学史の流れの中で、雇傭理論への道がどのように形成されてきたかを点検し、特にピグウとケインズの対立点に注意したもの（約六万字）」と述べている¹⁸⁾

1952（昭和27）年3月、入江先生は『松山商大論集』第3巻第1号に「支配労働価値説についての覚書－マルサス経済学研究の一齣－」を執筆し、マルサスの価値論を「支配労働価値説」として把握することに異議を提起し、「需要供給説」というべきであると論じた¹⁹⁾

この論文の概要について、入江先生は後に、「投下労働価値説と支配労働価値説とは全く別の局面に関する学説であり、後者は支配労働価値尺度説とよばれるものであり、支配労働価値尺度説が述べられているということだけでは労働価値説が述べられていると見做すことはできないという観点を提起し、マルサスの価値論が交換価値決定論が需要供給説、価値尺度論は支配労働尺度説であることを論示し、その根拠として、マルサスの自然価格論にメスを加えた」と述べている²⁰⁾

1952年度の大学入試が3月中旬に行なわれた。志願者は1,015名（経済652名、経営363名）で前年の602名を大幅に上回った。

1952（昭和27）年3月25日、大学第1回卒業式が挙行され、134名が卒業した²¹⁾ 1949年4月に2年次に入学した学生たちである。入江先生はまだ卒業

17) 入江奨「雇傭問題」堀経夫監修『経済思想史事典』創元社、1951年12月。

18) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

19) 入江奨「支配労働価値説についての覚書－マルサス経済学研究の一齣－」『松山商大論集』第3巻第1号1952（昭和27）年3月。

20) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

21) 文部省への『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書』（1961年9月7日）より。『六十年史（資料編）』も134名。なお、『温山会名簿』では135名の卒業である。

生を出していない。

2) 1952（昭和 27）年度

入江先生、赴任 2 年目、28 歳～29 歳にかけての時期である。

学長は伊藤秀夫が続けている（4 年目）¹⁾

4 月上旬、入学式を挙行し、322 名が入学した。経済学科は 209 名、経営学科は 113 名であった²⁾。この時に入学した中に安井修二、星川順一、山崎全正らがいる。

伊藤学長は式辞で新入生に対し、新制大学の使命を詳細に論じ、人格の完成、良き市民たれと激励した³⁾。安井修二は、伊藤学長の式辞に感動し、「今後充分なる批判精神を養い、真理を愛し、正しいものに敬意を表するようになりたいと思う」⁴⁾と述べている。

1952（昭和 27）年 4 月、夜間の松山商大短期大学部（商科第二部）が発足した（以後、短大と略す）。勤労者のための商業経済の実際的な専門教育を施すためであった。定員は 1 学年 100 名、修業年限は 2 年半、要卒単位は 62 単位以上、であった。学長は伊藤秀夫が兼ね、授業科目の大半は松山商大商経学部
の教員が兼務した。

短大に教授会が設けられた。入江先生（経済学）は、二神春夫（英語）、広田喜作（フランス語）、高村晋（法学）、高橋始（政治学）、岩本猛（体育）らと共に短大の貼り付けとなり、松山商大の方は兼務となった⁵⁾。しかし、授業の中心は商大の方であった。

本年度の入江先生の授業科目は、短大で経済学、学部で一般教養科目の経済学、専門教育科目の経済学史、そして本年度から 3、4 年生の専門演習をはじ

1) 『六十年史（資料編）』125～130 頁。

2) 『三十年史』143 頁。

3) 『松山商大新聞』第 38 号、1952 年 4 月 30 日。

4) 『松山商大新聞』第 111 号、1962 年 6 月 11 日。

5) 短期大学部併設については、前掲『伊藤秀夫と松山商科大学の誕生』を参照。

めて担当するようになった（以下、専門演習名はカリキュラム改革により演習第一とか、専門演習Ⅰなど変わるので、煩雑ゆえ、以後、ゼミ1、ゼミ2と略称する）。

ゼミ2（4年生）には、井本賀雄、片上博、萬井武臣、村木昭雄の4人が入った。そして、ゼミ2ではケインズの『一般理論』（塩野谷九十九訳）を読んでいる。ゼミ生の村木昭雄は「少壮気鋭の入江先生のご指導のもと、J・Mケインズ著、塩野谷九十九訳『雇傭、利子および貨幣の一般理論』を学び始めました。受講生が四人と小人数で、先生の温かいお人柄に包まれ、厳しいながらも、アットホームな雰囲気の中で過ごした一年間でした」と回顧している⁶⁾。

ゼミ1（3年生）には、丸山幸一、岡田健次、玉井源一、藤山栄一、渡部英典の5人が入った。ゼミ1のテキストは未確認である。

入江先生は一般教養科目の経済学のテキストは、中山伊知郎の『経済学の一般理論』であった。その授業のなかで、入江先生はある学生（鉄本作一）から次のように徹底的に批判されたと述べている。

「広島大学では坂本弥三郎先生は学生にヒックスの数学註を教材として経済原論を教えていらっしゃったのですが、松山商科大学ではそれは出来ない。もう一寸やさしいところをというんで中山伊知郎さんの『経済学一般理論』という本があって、それで担当した訳です。その内に学生と接触するようになりますよね。で、学生と接触する時に、まあ僕も生半可な知識を学生の頃から資本論について持っ取りましたし、資本論の方はその頃はもうキチンと買っていましたから、学生と話す訳ですよ。そうすると、散々学生から批判を受けまして、『先生のマルクス理論は極めて平板である。もう少し立体的に弁証法的に勉強せにゃいかん』と叱られまして（笑い）、で、『そんなもんかなあと』。今日はおいでになっていないかも知れ

6) 村木昭雄「四名のゼミ生で開講した入江ゼミナール」『つくし』第29号、2006年1月、37頁。

ないけれど、あの鉄本作一と言う人。今でも忘れんけれど、悪名高い、僕にとってはですね。僕に研究せにゃいかんということを教えてくれた人ですから恩人みたいな人です。そういう人に教えられてマルクスを勉強し始めた訳です」⁷⁾

この学生の批判が後、入江先生をしてマルクスをさらに研究し、また資本論研究会を組織する原因になったと推測される。入江先生の真摯な態度が窺われるエピソードである。

また、入江先生は、本年も経済学研究会の顧問を続けていた。

5月に開かれた、経済学史学会第5回全国大会において、入江先生は「マルサスの価値尺度論」について報告した。それは、「マルサスの自然価値論の構造を分析し、『価値尺度論』で示された支配労働価値尺度説が需要供給説に支えられた論理であることを提示する報告」であった⁸⁾

また5月、入江先生は創元社から共著で『近代経済学－四つの問題－』を出版した。それは先の堀経夫編の『経済思想史辞典』の「雇傭問題」を再録したものであった。

入江先生はこのころから、アダム・スミスの価値論の研究を本格的に始め、「スミスの真実価格論－スミス価値論の研究の一節－」というテーマで、1952年6月～1955年3月にかけて5本の論文を発表している。

①「スミスの真実価格論について(一)」

『松山商大論集』第3巻第2号、1952年6月

②「スミスの真実価格論について(二)」

『松山商大論集』第3巻第3・4号、1952年12月。

7)「入江獎最終講義」12頁。なお鉄本作一は1949年4月入学、太田ゼミで文芸部に所属、1953年3月卒業。

8) 入江獎「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

③「スミスの真実価格論について(三)」

『松山商大論集』第4巻第1号, 1953年(昭和28)3月。

④「スミスの真実価格論について(四)」

『松山商大論集』第4巻第2号, 1953年(昭和28)6月。

⑤「スミスの真実価格論について(五)」

『松山商大論集』第6巻第1号, 1955年(昭和30)3月。

入江先生はスミス価値論についての通説は、ある場合には投下労働価値説、ある場合には生産費説、また価値尺度論としては支配労働価値(尺度)説で、混乱・動揺している(高島善哉, 藤塚知二)、また、スミスには投下労働価値説があるが支配労働価値説と混同している(堀経夫)というのであるが、それらの通説を入江先生はスミスの国富論の叙述に「内在」して検討、批判し、スミスには投下労働価値説がないことを証明しようとしている。それは極めて意欲的で大胆な異説(入江説)である。

これらのスミスの論文の問題意識、概要について、入江先生は後に次の如く述べている。

「スミスが価値決定論としての投下労働価値説—諸商品の価値がそれらにふくまれている労働時間によって規定されるという考え方—を念頭におきそれを問題として取り上げている場合がある。と言いうるかどうか。この点を起点とし、スミスが何故に投下労働をもって価値尺度とせず、支配労働をもって価値尺度とするに至ったかという研究課題を含み、スミス価値論における混乱説が根拠のないものであるという見解を提起し、スミス価値論の統一的体系を掘りおこす作業を展開している。『国富論』第1編, 第5章を中心とし、それがスミス理論体系において与えられている意義を全体系的視野で究明している。その際に、『未獲得財』範疇の内在に着眼し、『本原的購買貨幣論』の役割に注目して、研究をすすめているのが、この研究の自覚された特色である」⁹⁾

また、この「真実価格論」について、入江先生は「最終講義」の中で、もっと平易にその真意をつぎのように述べている。

「スミスを読むうちにですね。スミスの研究書を読みながら、どうもおかしいなあと。元凶は、スミスの理解のおかしい元凶はマルクスにあるなあと。こう感じ始めた訳であります。で、つまり…あのマルクスがスミスをとことん批判しているわけですね。全体として。で、そのスミスへのマルクスの批判が、僕には気に入らん訳です。

スミスにはそんな覚えはないと。マルクスによってそんなに批判される覚えはない筈だ。それは、スミスの読み方が間違いじゃないかと言うので、スミスの本当の読み方を一生懸命勉強し始めた訳です。この成果が『真実価格論』という論文、長ったらしい論文になって表されてきた訳ですし、今以て未完成の状態ですが、最終的にはスミスの労働体系論という形で、一応過渡的に纏めておりますけれども、そういうものになった訳です」¹⁰⁾

1953（昭和28）年3月、入江先生が指導し、入江ゼミナール生が中心となり、資本論研究会が結成され、3月10日より隔日に研究会がもたれた。講師は入江先生である。『松山商大新聞』第47号に次のように記されている。

「入江講師のゼミナール学生、有志による資本論研究会が経済学研究会の一翼として結成され、三月十日より隔日、五十四番教室で入江講師を中心に熱心な討議を展開している。休暇中なので帰郷している者、家庭の事情で欠席している者もあるが、帰郷を取りやめた熱心者もあり、一五名前後が出席、研究は第三部第一分冊から進められ、最後の一章まで研究の見

9) 入江獎「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

10) 「入江獎最終講義」13頁。

込み。出席者は変転極まりない経済社会の一面でも把握せんの意気込みと、更には又経済学徒としての面目からも、何物かを捉えようとの大きな野望をもち、研究している。我々は学問に情熱をもち、真理を愛する学生諸君の参加を希望する」¹¹⁾

この資本論研究会の学生の中心は不明であるが、ゼミ生の渡部奨典（3年、1956年3月卒、後、『つくし会』会長）がその一人であろう。

3月13、14日に1953年度の入試が行なわれた。志願者は586名（経済412名、経営174名）で、前年の1,015名に比し大幅に下回った。そして、3月19日合格発表があり、経済学科192名、経営学科88名、計280名の合格者を出した¹²⁾

1953年3月25日午前10時より本学52番教室にて、商大第2回卒業式が挙行された。1949（昭和24）年4月に大学開校年に1年生として入学した学生たちで、269名が卒業した。伊藤秀夫学長は式辞で「君子和而不同，小人同而不和」の論語を引用して卒業生に多大の感銘を与えた¹³⁾ 入江ゼミは最初の卒業生を出した。井本賀雄，片上博，萬井武臣，村木昭雄の4名が卒業した。

3) 1953（昭和28）年度

入江先生赴任3年目、29歳～30歳にかけての時期である。短大の講師を続け、また商経学部の講師を兼務している。

学長は伊藤秀夫が続けている（5年目）。

本年は大学開学5年目、創立30年目にあたる記念すべき年である。伊藤学

11) 『松山商大新聞』第47号、1953年3月20日。

12) 同。

13) 同。なお、その後、追試験、再試験で卒業したものと思われるが、文部省への『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書類』（1961年9月7日）では281名、『六十年史（資料編）』では280名、『温山会名簿』では270名となっている。

長・理事長ら学校当局は次のような 30 周年記念事業を計画した。①記念式典を今建設されている講堂兼教室にて行う、②星野教授を委員長に本学全教授の「創立 30 周年記念論文集」を刊行する、③田中忠夫前校長を主筆とした「松山商科大学三十年史」を刊行する、④中央より学者その他の知名人を招き、記念講演会を行う、⑤愛媛の地方産業・経済の実態調査を行なう、⑥先輩諸兄、戦没者の慰霊祭を行う、等々¹⁾。

4 月初め、入学式が行なわれ、338 名が入学した（経済学科は 231 名、経営学科は 107 名）が入学した²⁾。

本年度の入江先生の授業科目は前年と同様で、短大の経済学、学部的一般教養科目の経済学、専門科目の経済学史、ゼミ 1、2 である。

本年のゼミ 1 には、橋本廸治、林茂憲、松沢宏、森本哲夫、菅晴美、二宮正らが入った。

また、入江先生は経済学研究会の顧問を続け、指導していた。ゼミ生の菅晴美はその中心となって活動した。さらに、入江先生は引き続き資本論研究会を指導していた。

短大の方は開学 2 年目で、4 月、伊藤秀夫学長は短期大学部の専任の新教員として稲生晴³⁾を銀行及び金融論担当の講師として、また、神森智⁴⁾を簿記の講師として採用している。この稲生、神森は後、松山商大の中心人物となり、ともに入江先生を尊敬していた。

4 月 20 日、入江先生は『松山商大新聞』第 48 号に編集子の要請に答えて経

1) 『松山商大新聞』第 46 号、1953 年 1 月 20 日、同第 51 号、9 月 20 日。

2) 『三十年史』143 頁。なお、合格者数より入学者が多いのはその後、補欠で入学させたものである。

3) 稲生晴は 1925 年 3 月西宇和郡生まれ。1945 年松山経済専門学校卒。旧制九州大学経済学部卒業、大学院特別研究生となり、1952 年修了し、九州大学経済学部助手となり、1953 年 4 月松山商科大学短期大学部の講師（松山商科大学兼務）に就任（稲生晴教授退職記念号の略歴、『松山商大新聞』第 53 号、1953 年 11 月 20 日などより）。

4) 神森智は 1927 年 9 月広島県生まれ。1947 年 3 月松山経済専門学校卒業。1953 年 4 月松山商科大学短期大学部講師に就任し、同年商経学部兼務となっている（神森智教授退職記念号の履歴及び経歴より）。

済学生必読書を紹介している。その大要は次の通りである。

「諸君の相対する世界を狭く限定して行けば『経済社会』に行きつく。その構造、仕組を知り、且つそこで働く力を養うために諸君は何を読んだらよいか。さしあたり、マルクスの『資本論』、シュンペーターの『資本主義、社会主義、民主主義』、ケインズの『一般理論』の三つをあげよう。

『経済社会』についての意見にくいちがいのあることを諸君はよく知っているだろう。右の三氏の書物はそれ等の食いちがいを、それぞれ独自の主張を通じて知らせてくれる筈である。中でも『資本論』は特異である。私は諸君を混乱させるためにそれ等をすゝめるのではない。諸々の意見の中で一つの意見を自己のものとして行くに当って、他を出来るだけ理解してもらいたいからである。

諸君にもし、書物にのめられないだけの真面目さと独立心と他を「尊重」する寛容さがあるならば、『資本論』だけを必読書としてすゝめてもよい。そこには歴史は理論と世界観とが統一されて、吾々の考えなければならない分野が実に豊富に準備されているのだから。尤も余程の忍耐力と熱意がない限り、何時までたっても憎まれる聖処女峰であると同時に接せられることなき聖書以外の何物でもないことになるであろう（中略）。

シュンペーターやケインズの考え方には『過程分析』に重点を置く傾きがある。この道を歩む人達には、さしあたり『ケインズ一般理論講義』と『新しい経済学』をすゝめよう。そうすれば、それをとりまく問題点が諒解出来るであらうと思う（中略）。

必読書の中にはかならずしも入らないであらうが、吾々の教養としては、経済学史や経済史の分野も包含する方が望ましいであろう。後者については何とも云われないが、前者についてはせめて『国富論』くらいを読まれたらどうだろう（中略）。

私は右の様に言う場合、個々の『専門』のことを考えないではなかった。

しかしこゝではそれにふれる場所ではないように思われる。とにかく『必読書』は最小限のそして精読の対象でしかないことを注意していたゞきたいのである」⁵⁾

この一文を読むと、入江先生は学生達にマルクス、ケインズ、シュンペーター、スミスなど経済学の基本文献の精読をすすめており、学問を愛している真摯な学究者であることが窺えるのである。

1953年度の文部省科学研究費助成金が入江先生に支給されることが決定した。入江先生の研究テーマは「スミス以前の価値論」であった。このテーマについて入江先生は「スミス以前の価値論を研究する場合のねらいは結局資本制生産の生成期における貨幣経済社会の生まれ方を基礎的に把握することであり、間接的には私のスミス研究の成果をスミス価値論の『生成過程』において補足することを狙っている」⁶⁾と述べている。

1953年7月20日、入江先生は『松山商大新聞』第50号に「経済と政治－MSAの諸問題を廻って－」を執筆している。そこで、入江先生はMSA（日米相互防衛援助協定）の本質について、MSAはアメリカの国家的利益又安全保障を維持強化すること目的であり、軍事・経済援助を受けた日本は防衛能力を増強履行しなければならない。すると、憲法問題が必ず起り、また、日本経済の構造が著しく軍事的性格を帯びて来る危険がある。この援助の背景はアメリカの最も非生産的な種類の「資本」（軍需産業）が推進力であり、この援助が日本の自立経済確立の方向、生活水準の安定向上の方向にプラスの効果を有つことは極めて困難である、と述べている⁷⁾

1953年10月、入江先生は堀経夫主催の「17、18世紀経済思想史研究会」で「スミスの資本理論研究」を報告した。その報告は「スミスの価値論を真実価

5) 『松山商大新聞』第48号、1953年4月20日。

6) 『松山商大新聞』第49号、1953年6月20日。

7) 『松山商大新聞』第50号、1953年7月20日。

格論としてとらえるという観点に立って、それがスミスの理論体系にどのような特徴を与え、どのような理論的構造と性格を作りあげるに至っているかを明らかにするというねらいで、第二編のとくにストックと生産的労働論にメスを加える報告」であった⁸⁾

10月20日の『松山商大新聞』第52号に入江先生は「中国通商視察団の帰国を迎えて」を寄稿している。そこで、入江先生は、衆参両院の有志による日中貿易促進連盟が訪中し、貿易協定を成立させたことは高く評価される。私の念頭にあるのは、MSA問題と日中貿易の関係であり、日本が「自由主義圏」、中国が「社会主義圏」に属するという国際政治が日中の友好関係と日中貿易を阻害している最大の原因であり、日中間の貿易・友好関係がすすめば、日本への再軍備要請は現実的意義を失い、平和経済建設の方向に吾々を導くからで、私は中国通商使節団の功績を讃えたい。平和への期待は人間の善意と人間の進歩への確信を前提としてのみ意味あるものだ、と述べている⁹⁾

11月20日、『松山商科大学三十年史』が刊行され、21日には、新講堂（一部2階建て、538平方メートル、現在の50年記念館の位置）が完成した。

そして、11月21日から3日間、創立30周年記念事業が盛大に行われた。21日には新講堂にて、学習院大学院長の安倍能成らによる講演会、22日には創立30周年記念式典が盛大に挙行された¹⁰⁾

伊藤秀夫学長は、その式辞において、大正12年春松山高商として発足以来30年、その間の道は決して平坦なものではなかったことを述べ、その難関を突破することができたのは、新田家の援助、教職員の和、温山会、父兄会等の援助の賜であると感謝し、今後校運をますます隆々たらしめ、志を達成したいと抱負を述べた¹¹⁾

8) 入江奨「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。なお、堀経夫博士喜寿記念『経済学の研究と教育の五十年』（世界保健通信社、1973年11月）の754頁では、発表は1953年9月6日「スミスの資本論について」となっている。

9) 『松山商大新聞』第52号、1953年10月20日。

10) 『松山商大新聞』第53号、1953年11月20日。

また、この30周年記念事業の期間中、入江先生が司会して、「本学三十年の回顧座談会」が行なわれている¹²⁾

1953年（昭和28）11月、入江先生は「松山商科大学創立三十周年記念論文集」に「スミスの自然価格体系と分配論との関連」を執筆した。その目次は次の如くであった。

- 「一 序説－問題の提起
- 二 スミスにおける真実価格論と自然価格論との関係
- 三 スミスに於ける搾取理論
- 四 「国富論」、第一編、第六章におけるスミスの意図－特に「分解」論と「構成」論との関連を中心として－
- 五 むすび－自然価格体系と分配論との関連」

この論文の概要について、入江先生は後に「スミスの真実価格論と自然価格論との関連を明らかにし、その価格構成論が真実価格論のより具体的な、しかし、質的な規定を－生産、交換、分配の有機的関連についての質的な規定をめざすものであることを究明し、スミスにとっては自然的真実価格論即分配論であったという判断をみちびき、第一編と第二編の有機的関連の仕方に注目している」¹³⁾と述べている。

3月中旬、1954年度の入試が行なわれ、志願者は978名で、334名の合格者を発表した。競争率は2.9倍であった¹⁴⁾

1954年3月、松山商大第3回卒業式が挙行され、226名が卒業した¹⁵⁾ 入江

11) その全文は『松山商大新聞』第53号、1953年11月20日、にある。

12) 『松山商大新聞』第53号、1953年11月20日。

13) 入江獎「松山商科大学大学院設置認可申請書」の研究概要。1971年11月10日。

14) 『松山商大新聞』第55号、1954年5月20日。

15) 文部省への『松山商科大学（経済学部、経営学部）設置認可申請書類』（1961年9月7日）より。『六十年史（資料編）』では227名、『温山会名簿』では236名。

ゼミでは藤山栄一，丸山幸一，渡部奨典（後，つくし会会長）ら5名が卒業した。